

希望を耕す

有難き留学生

東京大学特任教授・建築学

松村秀一

Shuichi Matsumura

ある会報での連載

十数年前、日本建築学会の会誌『建築雑誌』の編集委員長を務めたことがあった。その時は偶々お隣の社会基盤学科の家田仁教授（当時）が土木学会で同じ立場にいらしたので、両学会誌で特集の自身が全く同じという冒険を試してみたりもした。今となっては懐かしい思い出だ。

建築学会の会誌編集委員会は、委員長が選んだ二十名強の委員で構成され、二年間同じメンバーで二十四号分の企画・編集を担当する。学会の一般の委員会では、同じ分野の方々が集まり、細分化した専門分野のことについて話し合う場合が殆どだが、会誌編集委員会は、建築学の多様な分野を扱う必要があるため、様々な専門分野の人で構成されるのが常である。委員長はそういった多様な分野の委員をどのように選ぶかということ、私の場合、半分ほどの方は、同じ職場の他分野の先生に紹介してもらおう方法を探った。だから、その方々とは初対面だった。ところが、二年に亘って毎月色々と議論していると、初対面どころか旧知の友人のように思えてくるから不思議なものだ。かつて私が二年間

ご一緒した委員会のメンバーとは、今でも年に一度旅に出て交流を続けている。

都市史、殊にアジアの都市史を専門にしている法政大学教授の高村雅彦先生もその一人である。先生は、中国に留学していた経験もあり、中国の都市には滅法強い。編集委員会で一緒にいて以来、中国のことを詳しく知りたい時には、いつも気軽に教えを乞うてきた。

最近、その高村先生からある依頼がきた。住宅関連の企業や団体八十社ほどで構成する日中建築住宅産業協議会の会報『日中建協NEW S』に連載してほしいというのである。二年間連載を続けてきた高村先生の後任で、中国関係のことを書くことが望まれていた。お引き受けることにしたものの、私は中国を専門に研究したこともなければ、中国に出張する機会は幾度となくあったとは言え、一度の出張で一週間滞在したことすらない。特にこの二年近くは中国を訪れていない。さて、どうしたものか。

こんな私に、中国の建築に関わる事柄や、建築界の日中関係に関連して他の方々にあまりない経験をしている面があるとなれば、東京大学で研究室を運営するようになってから今日までの

三十年程の間に、かなりの数の中国人留学生が大学院に入学し、修士課程や博士課程を修了してくれたことくらいだと思う。皆とても優秀な方で、日中両国更には世界の建築界で活躍している方も少なくない。そこで、誠に他力本願ながら、私の連載は、かつての中国人留学生との座談会やインタビュー主体にしてみようと企てた。最初は、現在も日本に住んでいる初期のOG、OBにお願いした。

もっと大きな世界がある

最も早い時期に留学してきた二人は、大学卒業後数年間の実務経験を経て一九八〇年代末に来日した。中国の企業では、彼らが就職した当時は久しぶりの大卒社員だったという。そういう世代だから向学心、向上心ともに旺盛だったのだろう。国を飛び出し、経済水準の差がまだまだ大きく、生活費を確保するだけでも大変な苦勞を強いられる日本を選んで来てくれた。

三十年前、学生だった時には、指導教員である私の前で苦勞話などこれっぽっちも話さなかったから、彼らが当時どれほど頑張ったか、日本を暮らしていたかは、初めて具体的に聞いた。「そ

こまでして、よく日本に来てくれたね」と言うのと、「中国人だからね」という答え。「中国は大きな国だけど、外に広がるもっと大きな世界を見てみたいのが中国人。そこが日本人とは違う」とのこと。「外の世界に出ることを両親も止めない。親族から留学資金を集め、『行くなら二度と戻らなくていいぞ』というくらいの気持ちで見送ってくれた」のだそうだ。

二人とも来日してからほぼ三十年。大学院を修了した後、それぞれ日本の建設会社で数年働いた後に独立。今では二人とも日本国籍をとり、立派な企業経営者である。座談会の後、一人が所有する湾岸の超高層マンション最上階にある住民専用レストランで乾杯。有り難き幸せ、有り難き留学生である。

日中の架け橋

話題は自然と今日の中国建築界の状況にも及んだ。

彼等が大学院生だった頃に選んだテーマは建築生産の工業化。一人はプレキャストコンクリートを用いた躯体構法、もう一人は内装のプレハブ化を熱心に研究していたが、労働賃金が上

昇した今日の中国では、まさにこれらが国をあげてのテーマになっているという。

躯体構法を研究していた方の一人は、中国の政府関係者から、建築生産の工業化という点での先進国である日本での建設現場や工場の見学を交えた、中国建築技術者向けの工業化研修コースを企画してほしいと頼まれたという。「これをビジネスにするのは難しいが、自分にとって大事な日中両国の架け橋になれば」という思いで一肌脱いでいる。嬉しいことに私も一コマ分の講義を依頼された。

最後に、彼らの後輩にあたるかつての留学生たちの近況について聞いてみた。あれだけ広い中国。研究室にいる時は、韓国からの留学生等と比べて、同国人同士の付き合いはごくあっさりしているように見えていたが、さにあらず。ほぼすべてのOG、OBの近況、活躍ぶりを教えてくれた。

単に日中間のビジネスの話ではない。より大きな世界の話、より身近な人間の話をしているのだ。かつての留学生との貴重なひと時が、ややもすると偏狭になりがちな私の思考パターンをぐっと広げてくれたように感じた。